北の鉄道風景

Train number; 9381
2021.2.11 14:26
1/640, f/7.1, ISO 200, f=24mm, Daylight/Sunny
8256×5504 Raw

第119回

映像のエネルギー

久しぶりで妻と並んで小津安二郎の「東京物語」を観た。私も妻も、そろって笠智衆と東山千栄子が演ずる老夫婦に自己投影する年齢になっていることに愕然とした。小説であれ映画であれ、いい作品は受け取り手の経験・境遇・年齢などによって、触れる度に新たな発見があると言われるが、今回の「東京物語」は冷酷なほどにそれを証明してくれた。

小津作品は、海外の名監督たちにも影響を与えていることは有名で、どの場面を十秒間切り取っても、原稿用紙二、三枚は必要なほど講釈できるのであるが、強いて一言で言えば、ストーリーを追いかける映画ではない、ということだろうか。映像からストーリーが組み上がっていくのだ。映像は翻訳がいらないから海外の映画人をも魅了してしまうのではないか。

では、こうして映像の端くれを公衆に提供している自分はどうなのか。私の映像から物語は生まれるのか、と問

かつて普通列車の車内には、小津映画のような場面がいたるところに散らばっていた。
室蘭本線　1975

写真と文＝眞船直樹

いかけるほど、自信はなくなっていく。「君の写真はさっぱり面白くない」と写真の恩師に言われた青春真っ只中のあの時から、その言葉を座右の銘のように唱えながらシャッターを押してきたが、成長した実感はない。「いい写真撮れましたか？」という、挨拶じみた声がかかれば、場をしらけさせないように私は「まあ」などと答えておくが、本心は「全然だめ」なので、それはウソである。ウソはつきたくないから、撮影現場で人と会いたくはない。相手が白鳥くらいになると、遠慮会釈なく「そんなとこで撮ってるのか？」と核心をついて来るので正直な会話ができて気持ちがいい。

「東京物語」は尾道が重要な舞台だから山陽本線が出てくる。老夫婦が東京を後にするのは急行「安芸（あき）」であり、原節子が尾道を去る列車を牽（ひ）くのはC59である。隣の妻の「どうしてあれだけでC59ってわかるの？」という問いに言葉に窮した挙げ句、青年のような返答が口をついて出た。「恋人だから」。小津が撮ったC59は、青春時代の蒸気機関車への想いを吐露させる映像エネルギーを保っていることになる。 Ⓙ